

食用ホオズキ「ゴールデンベリー」の 高品質安定生産のための栽植密度

農業総合センター山間地帯特産指導所

食用ホオズキは、県北中山間地域を中心に栽培され、特産作物としてブランド化が進められています。しかし、全国的にも栽培事例が少なく、栽培技術が確立されていません。このため特産作物として定着するには、品質を維持しつつ、面積あたりの収量を向上させる栽植密度を明らかにする必要があります。本試験では食用ホオズキ「ゴールデンベリー」の露地栽培における栽植密度を検討し、農家慣行の株間 100cm から株間 60cm に見直すことで、果実品質を低下させることなく、可販収量が増加することを明らかにしました。

株間60cmで6割以上の増収

現地では食用ホオズキ「ゴールデンベリー」を株間 100cm×畝間 200cm で栽培しています。そこで、株間の違いが収量に及ぼす影響について検討しました。その結果、株間を 60cm に狭めることで 1 a 当たりの可販収量が約 1.6 倍に増加しました（図 1）。

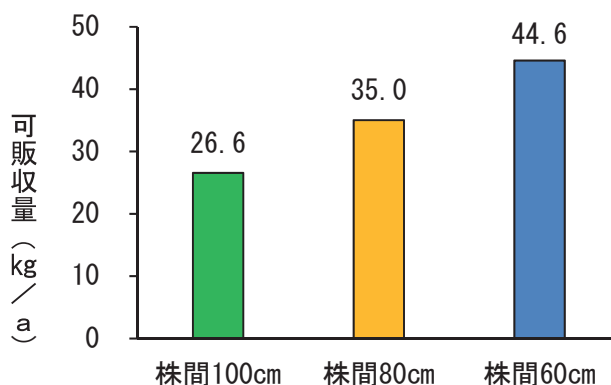


図 1 栽植密度の違いが可販収量に及ぼす影響
注) 畝間はすべての試験区で 200cm

表 1 栽植密度の違いが果実品質等に及ぼす影響

試験区	可販数 (個/株)	平均 1 個重 (g)	糖度 (Brix%)
株間 60cm	51.0	9.9	12.7
株間 80cm	53.5	10.1	12.5
株間 100cm	52.0	10.0	12.5

慣行と同等以上の果実品質を実現

一般的には、栽植密度を高めることで、果実品質に及ぼす悪影響が懸念されます。本試験では株間 60cm であっても株当たり可販数、平均 1 個重、糖度及び品質は慣行と同程度で、果実品質の低下は見られませんでした（表 1）。

最適な栽植密度

本試験から県北地域における食用ホオズキ「ゴールデンベリー」の最適な栽植密度は畝間 200cm×株間 60cm との結果になりました。本試験結果を活用することで、1 a 当たりに必要な苗数は 33 本増えますが、収量及び所得は約 1.6 倍に増加します（写真 1）。



写真 1 株間 60cm (左) 及び株間 100cm (右) の栽培状況